

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：32644
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2019～2021
 課題番号：19K00943
 研究課題名(和文) 司馬江漢「地球分図」の史料性の分析を主とした江戸知識人の海外情報受容過程の解明

研究課題名(英文) Research on the elucidation of the process of receiving overseas information by Edo intellectuals, mainly by analyzing the Features and Values of the " Chikyuu Bunzu " created by Shiba Kokan.

研究代表者
 吉田 厚子 (YOSHIDA, Atsuko)
 東海大学・文化社会学部・教授

研究者番号：50408069
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：この研究は、これまでほとんど着目されていなかった司馬江漢「地球分図」に初めて焦点を当て、その製作過程を分析することを通じて史料性や史料的価値を解明し、司馬江漢の海外情報受容過程を具体的に究明することを目的として実施した。司馬江漢と交流のあった大槻玄沢らの事例との比較研究により、「鎖国」下にあった知識人たちの海外情報受容過程が明らかとなり、当時の日蘭・日魯文化交流史の実態の一端も見出せた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究の学術的意義は、司馬江漢「地球分図」の製作過程の分析を通じて、この史料の特質や史料的価値が明らかとなり、洋学史研究者などへの新史料活用の便をはかるための基盤が形成されたことにある。また社会的意義としては、「鎖国」下にあった当時の知識人たちの海外情報の入手方法や受容過程が具体的に解明されたことにより、グローバル化・情報化が著しく進展した現代社会を生きる我々に、海外情報受容の在り方を見つめ直す素材が提供されたことを挙げるができる。

研究成果の概要(英文)： This research focused for the first time on the " Chikyuu Bunzu(地球分図)" of the Shiba Kokan(司馬江漢), which had received little attention until now, and was conducted with the aim of elucidating the historical significance and value of historical sources through analyzing its production process, and to concretely investigate the process of receiving overseas information of the Shiba Kokan. Comparative research with the case of Ohtsuki Gentaku and others, who had exchanges with Shiba Kokan, revealed the process of accepting foreign information by intellectuals who were under "national isolation," and we were able to find a part of the actual situation of the history of Japan-Netherlands and Japan-Russia cultural exchange at that time.
 I also digitized some world maps of the time associated with this map. I will publish these study results in the near future.

研究分野：江戸時代の日蘭・日魯交流史

キーワード：司馬江漢 「地球分図」 史料論 文化交流史 江戸時代 洋学史 海外情報受容過程 日蘭・日魯

1. 研究開始当初の背景

周知の通り、我が国の江戸時代は、その大半の時期がいわゆる「鎖国」下にあった。そのため、当時の知識人たちは、かえって海外情報への飽くなき好奇心を抱き、オランダ語を自ら習得し、オランダ語で記された書物(以下蘭書と略記)の読解・翻訳作業を通じて、世界の新たな情報を直接獲得するものもいた。また彼等の中には、司馬江漢(1747年～1818年)のように、船載されたオランダを中心とする西洋で製作された地図・地球儀を模写・謄写したり、自ら製作したりする者も出現した。一方当該期には、ロシア使節やロシアからの帰還漂流民によって将来された地図・天球儀・地球儀に注目し模写する知識人たちも現れた。従って、かかる当時の知識人たちの海外情報の入手方法や受容過程がより具体的に解明されれば、グローバル化・情報化が著しく進展した現代社会を生きる我々に、海外情報受容の在り方を見つめ直す素材が提供され、現代的意義を有する史的研究成果を生み出せることになる。

ところが、オランダ・ロシアからの海外情報受容という、19世紀前半までに生じた新局面を担った知識人に着目して、彼等がどのように海外の情報を集め、如何なる分析をしたのか、その分析内容が何らかの為政レベルで活用されたのか否か等については、従来は殆ど明らかにされてこなかった。それは、当該期の知識人が蒐集した海外情報に関連する史料については、その内容や史料性が判然としていないため、史料的価値に気づかれていないものが存在しているからである。

本研究で着目する司馬江漢「地球分図」(江漢の識語では「地球分界之図」)は、旧熊本藩主細川家に伝来した文化財のコレクションの一つで、熊本大学附属図書館永青文庫に所蔵されている。「地球分図」は29折の手書手彩の地図類からなっており、司馬江漢がロシアやオランダより伝来の書物等を通じて得られたと思われる海外情報の宝庫である。ところが「地球分図」は、長年にわたりその存在すら知られていなかった。その後、所在が明確になってからも、着目する研究者は誰一人としておらず、埋もれたままと形容しても齟齬がない状況にある。近年出版された『永青文庫叢書 細川家文書 絵図・地図・指図編』(吉川弘文館、2013年)では、ようやくその図版29折全てをカラー写真で紹介したが、肝心の江漢の識語が張付けられた桐の箱蓋の写真は掲載されていない。そればかりか、「図版173～201は「地球分図・式十九」である。鎖国によって閉ざされた日本にとって、長崎の出島は唯一欧米に開かれた窓であった。享保年間、八代将軍徳川吉宗が実学を奨励してキリスト教関係以外の洋書を解禁した結果、出島からもたらされる書物は医学・天文暦学などの研究を促進した。司馬江漢の添書付きの「地球分図・式十九折」が存在する。地球全図を作成するために蘭書から各地の地図を模写している。添書の最後に「文化辛未年(文化八年)春分 西洋学士 江漢司馬 峻誌」と記している」と解題した上で、一図版に何が描かれているかを簡単に解説するに止まる。つまり、どの蘭書を参照したのかなどの海外情報受容系統の分析が全くなされておらず、高い史料的価値を内包していることには、残念ながら言及されていない。

司馬江漢は、江戸時代において、民間の画家でありながら、天文・地学、動植物などの西洋博物学、自然科学に興味を持ち、比較的自由にそのなかに進歩的な思想を学ぶことができた人物で、平賀源内、前野良沢、大槻玄沢らの蘭学者らとも交流があった。天明以降の蘭学社中に交わり、宇宙観・世界観を一挙に拡大させていった。とりわけ世界図に関しては、船載洋書に記された銅版画の技法を習得し、17～18世紀に刊行された西洋製世界図を銅版で模刻し出版(『輿地全図』『地球全図』『地球楕円図』)した。

従って、司馬江漢「地球分図」の製作過程が具体的に判明し、その史料的特質が解明できれば、江戸知識人の海外情報受容の過程に関する新知見が得られるのみならず、当時の日蘭・日魯文化交流史の実態をもより具体的に明らかになる可能性がある。

以上の学術的背景に鑑みて、本研究課題の核心をなす「問い」として、「「地球分図」は、江漢によってどんな過程で製作され、如何なる史料的価値を有するのか」「地球分図」の史料性と史料的価値の解明)、江漢は海外情報をいかにして受容したのか(司馬江漢の海外情報受容過程の解明)、江戸知識人の海外情報受容の在り方や当時の日蘭・日魯文化交流史の実態は、現代を生きる我々に何を示唆するのか(現代的意義の探求)」の3つを設定した。

2. 研究の目的

本研究の最大の目的は、これまで埋もれていた司馬江漢「地球分図」に焦点を当て、その製作過程を分析することを通じて史料性や史料的価値を解明し、司馬江漢の海外情報受容過程を具体的に究明することにある。

これまで司馬江漢「地球分図」に着目した研究は、内外において皆無に等しく、洋学史研究者ですら全く注目してこなかった。唯一その存在を図版入りで紹介した解題があるのみである。司馬江漢に関する研究としては、鮎沢信太郎「泰西地理学による司馬江漢の啓蒙活動」(『歴史地理』第72巻3号、1938年)、菅野陽「永青文庫所蔵 司馬江漢製『地球儀』」(有坂隆道編『日本洋学史の研究』創元社、1985年)、朝倉治彦・海野一隆・菅野陽・中山茂・成瀬不二雄・沼田次郎編『司馬江漢全集』全4巻(八坂書房、1992～94年)、同編集『司馬江漢の研究』(八坂書房、1994年)などがあるが、「地球分図」には一切触れていない。また図録として『司馬江漢 百科事展』(神戸市立博物館・町田市立国際版画美術館、1996年)などもあるが、やはり「地球分図」への言及はない。

しかし研究代表者の初見時には、かなり保存状態もよく、江漢の作品だけに埋もれたままでは忍びない。従って本研究では、当該史料に光を当て、その内容と史料的価値を広く公表することを期している。

3. 研究の方法

本研究は、上記で示した学術的な「問い」～ に応じて、以下のア)～オ)の成果を出すために、研究代表者1人と研究協力者2人により、3年次計画で遂行される。研究協力者は、吉田忠(東北大学・名誉教授)・岩井憲幸(明治大学・名誉教授)の2名である。本研究では、研究代表者が「地球分図」全体の史料性の解明に従事して研究を統括するが、吉田忠はオランダ語や蘭書、天文図に精通しているため、主に天文図に関わるオランダ系情報受容過程の分析を分担し、岩井憲幸はロシア語やロシア系世界図に精通しているため、主にロシア地図に関わるロシア系情報受容過程の分析を分担する。

「地球分図」の史料性と史料的価値を解明する

ア) 司馬江漢は、何故、どのような経緯で「地球分図」を作成したのかを明らかにする。

イ) 史料的価値を明らかにするために、司馬江漢が如何なる情報や書物・地図・器物を参照して製作したのかを特定し、製作過程を具体化する。

司馬江漢の海外情報受容過程を解明する

ウ) 司馬江漢が「地球分図」を作製するに当たって参照した情報源・史料源の入手・閲覧ルートを検討し、江漢の海外情報受容過程を明らかにする。

エ) 司馬江漢の海外情報受容の在り方が、当時においてはどの位置づけられるのかを、江漢と交流のあった知識人などの場合と比較検討し、江戸知識人の海外情報受容の実態や、当時の日蘭・日魯文化交流の新局面をより鮮明にしていく。

本史料研究の現代的意義を探究する

オ) 上記の作業により得られた成果を取り纏め、口頭発表や論文化を行う。また一般国民向けに分かり易い解説を付した図版集の刊行をめざし、現実を見つめ直せるようにする。

平成31年度(令和元年度)の研究計画

上記のア)イ)の作業を行うにあたって、初年度のみ、熊本大学文学部付属永青文庫研究センターで「地球分図」の再調査を行う。ア)については、桐の箱蓋に張付けられた江漢の識語の分析を主に行う。イ)については、各種史料との照合が必要なので、所属先で閲覧できない史料については、神戸市立博物館など他機関での史料調査を行う。

上記のウ)の作業については、これまでに受領した「科学研究費補助金」などで整備した設備図書などを駆使して行う。江漢の著作や伝記史料を主に分析する。

上記のエ)については、大槻玄沢などの江漢以外の蘭学者に関する分析を行うにあたって、特に「稲垣家旧蔵地理学関連史料」の閲覧も要するので、津市図書館で史料調査を行う。

上記のオ)については、各研究協力者の成果との摺り合わせが必要なので、東海大学で2回研究打合せを行う。公表できる成果を京都大学で開催の新日本古地図学会で口頭発表する。

令和2年度以降の研究計画

令和2・3年度ともに、上記のア)～オ)の作業を継続する。最終年度は、特にオ)の作業に重点を置き、複数の成果を論文化して公表するとともに、図版集の刊行をめざす。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

「地球分図」の史料性と史料的価値の解明

研究代表者は、研究実施計画にのっとり、司馬江漢は、何故、どのような経緯で「地球分図」を作成したのかに加え、「地球分図」所収の29折の図版の分析を通じ、江漢が如何なる情報や書物・地図・器物を参照して製作したのかを、既存及び新規購入の各種史料と照合しながら特定し、製作過程を具体化する作業を行った。それを通して、本図が有する史料的価値を探究した。

司馬江漢の海外情報受容過程の解明

研究代表者は、司馬江漢が「地球分図」を作製するに当たって参照した情報源・史料源の入手・閲覧ルートを、『司馬江漢全集』所収の著作・作品や伝記史料にあたりつつ、人的ネットワークや生涯の行動などに鑑みて考察し、江漢の海外情報受容過程を明らかにした。加えて、江漢の海外情報受容の在り方が、当時においてはどの位置づけられるのかを探究するために、江漢と交流のあった大槻玄沢や伊勢商人稲垣定毅などの事例と比較検討していく作業も行った。

一方、研究協力者の吉田忠は、司馬江漢の主に天文図に関わるオランダ系情報受容過程の解明に取り組んだ。司馬江漢は地動説をはじめ西洋天文学の知識の普及家としてよく知られている。初期の著作『和蘭天説』(寛政八年)に出る観測器具の図は、蘭書ではなく、中国に渡った宣教師の一人フェルピースト(南懐仁)の『靈台儀象志』(1674)に付けられた図によっている。江

漢の紀限儀之図の全体像は南懷仁の第三十三図に基いているが、窺筒を動かす歯車機構は第五図を適宜アレンジして描いている。さらに、象限儀の図自体は西洋式ではなく、垂剣を備えた当時用いられていたものを示すが、その脇に記された対角線目盛は『靈台儀象志』により描かれるものである。天文方を中心とするこの西学漢籍の受容については論文化して論じ、江漢の対角線目盛模写についても言及した。また江漢の天文図に関わるオランダ系情報受容過程の解明に資する資料集の分析もした。

研究協力者の岩井憲幸は、江戸知識人の主にロシア地図に関わるロシア系情報受容過程の分析を行い、その成果を論文化した。

現代的意義の探求

江戸知識人の海外情報受容の在り方や当時の日蘭・日魯文化交流史の実態が、現代を生きる我々に示唆することを広く示すために、上記の成果を公表するための準備をした。具体的には、司馬江漢「地球分図」解析に関連する、収集済みの諸機関所蔵の地図コレクション等の整理とデジタル化を行った。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

既に言及したように、司馬江漢「地球分図」に着目した研究は、内外において皆無に等しかった。従って本研究で着目した司馬江漢「地球分図」に関する成果がとりまとめられ、衆目の認めるところとなれば、世紀の大発見となり、新聞紙上でも大々的に報じられる可能性がある。ここに、本研究の学術的独自性が認められる。

また本研究は、史料研究としての性質を強くもつが、単に「地球分図」の史料性や史料的価値が解明されるのみならず、その作業過程で、江戸知識人の海外情報受容過程も明らかとなり、延いては当時の日蘭・日魯文化交流史の新たな実態をも復元できる可能性をも有していた。その成果を公表できれば、関連する洋学史研究者などへの新史料活用の便がはかれることに加えて、史的研究ではあるが、情報化・グローバル化した現代社会を生きる我々にとっても、海外情報受容の在り方や文化交流の現実を見つめ直す契機となり、国内外にインパクトを与えることになる。

(3) 今後の展望

本研究では、司馬江漢は、何故、どのような経緯で「地球分図」を作成したのかに加え、「地球分図」所収の29折の図版の分析を通じ、江漢が如何なる情報や書物・地図・器物を参照して製作したのかを各種史料と照合しながら特定し、製作過程を具体化する作業を展開した。そのため、研究代表者が嘗てオランダのライデン大学図書館で収集・撮影した複数の世界図のデジタル化作業も著しく進展させることができた。研究代表者は、これらの研究成果を基盤として、すでに「司馬江漢の世界地理・天文関連図版の製作過程に見る江戸知識人の海外情報受容の実態」と題する新たな研究(2022年度科学研究費補助金・基盤研究(C)採択)を開始している。

一方で研究代表者はこれまでに、大槻玄沢ら蘭学者の海外情報受容過程についての複数の成果に加え、司馬江漢と篆刻家の長谷川延年が、大槻玄沢やその弟子の山村才助が受容していた情報を、忠実に書写していることも明らかとしてきた。従って、本研究で解明した司馬江漢の海外情報受容過程を足がかりとして、江戸知識人の人的ネットワークに関する研究を更に飛躍させる所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岩井憲幸	4. 巻 549号
2. 論文標題 古河歴史博物館蔵『魯西亜言語集』の特徴と価値	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 明治大学教養論集	6. 最初と最後の頁 1-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩井憲幸	4. 巻 551号
2. 論文標題 『北椋聞略』巻之十一 言語 片仮名ロシア語索引	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 明治大学教養論集	6. 最初と最後の頁 119-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田忠	4. 巻 なし
2. 論文標題 『新製霊台儀象志』の受容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 医学・科学・博物 東アジア古典籍の世界	6. 最初と最後の頁 145-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田厚子	4. 巻 なし
2. 論文標題 ジャガイモ、薩摩芋	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 洋学史研究事典	6. 最初と最後の頁 93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 吉田忠	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大分県教育委員会	5. 総ページ数 625
3. 書名 大分県立先哲史料館編『大分県先哲叢書 帆足万里』史料集第2巻、解題と校注	

1. 著者名 吉田忠	4. 発行年 2021年
2. 出版社 大分県教育委員会	5. 総ページ数 497
3. 書名 大分県立先哲史料館編『大分県先哲叢書 帆足万里』史料集第3巻、解題と校注	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	吉田 忠 (YOSHIDA Tadashi)		
研究協力者	岩井 憲幸 (IWA I Noriyuki)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------